

# 黄河中流域竜山期諸文化の基礎研究（一）

——豫央（潁河上流地区）——

小川 誠

## 目次

はじめに

### I 豫央

#### 一 潁河上流地区

#### （一）王城崗遺跡出土の土器

#### （二）諸遺跡の比較検討

はじめに

一九二八年に山東省歴城県（当時）で城子崖遺跡が発見され、いわゆる竜山文化が確立されてから六五年以上の歳月が流れようとしている<sup>(1)</sup>。その間、研究者の関心はとだえることなく竜山文化にそそがれ続けてきた。竜山文化の研究は、中国考古学の歩みのなかで、いくつかの転機を織り込みながら、ひとつの大流をつくりあげてきたといっても過言ではない。

そして、今日においては、調査発掘資料が増大したことにともない、従来の意味における「竜山文化」はもはや成立しがたい状況となっている。たとえば、一九八四年に出版された『新中国的考古発現和研究』では、黄河中流域の竜山期諸文化を、「王湾」「後岡」「三里橋」「王油坊」「下王崗」の五類型に分けて把握している<sup>(2)</sup>。この事例だけをとりあげても、河南、山東、江蘇の竜山期諸文化を含めて呼んだ新中国成立以前の竜山文化はいうにおよばず、五〇年代、六〇年代に「典型」「河南」「陝西」「廟底溝二期」の各地域類型の総称として使用された竜山文化<sup>(3)</sup>も、もはや学史的な意味しかもちえなくなっている事実は誰の目にもあきらかであろう。十余年前の時点で、すでに竜山文化という概念は、地域的な考古学諸文化の多様性を包み込むことができなくなっていたのである。現実には、八〇年代以降は、上記の五類型に代表されるような地方類型、もしくは、それらの下位に位置する考古学文化が研究の一単位となりつつある<sup>(4)</sup>。このような、調査発掘資料の増大により引き起こされた研究単位細分化の趨勢は、今後当分のあいだ続

いていくものと予測される。

さて、竜山文化なる包括的文化概念が崩れさり、かわって、地域文化が林立する多元的な様相が浮彫りにされていくなかで、あらたに登場したのは、竜山文化の存続した時代を文化史的な画期としてとらえようとする動きであった。これに関しては、一九八一年に嚴文明氏が一石を投じた論考を提起している。<sup>7)</sup>氏は、過去に竜山文化の地域類型とされてきた一連の諸文化は独立した考古学文化である反面、(相互影響の帰結として)相似た特徴を共有していると指摘したうえで、これらを総合的に把握する概念呼称として「竜山時代」を提唱した。竜山時代とは、新石器晩期の特定の時期(前二六―二二世紀)にみられる文化的な斉一性を、<sup>8)</sup>空間的なひろがり(共時面)に着眼する文化枠ではなく、時間的なくぎり(通時軸)に主眼をおいた時代枠で掌握しようとする試み、そのなかから生まれた新造語であり、竜山文化の一元的な側面をとらえるうえにおいて、あらたな方向を提示したといえる。横から縦へとでも形容できるこの発想の転換は、竜山文化の一面面に理論面から光をあてたものとして注目を浴び、爾来、このような考え方は多くの研究者に受け入れられ今日に至っている。<sup>9)</sup>

ところで、「竜山時代」のような視点が登場してくる背景に、地方文化の多様化現象があったことはいまでもない。しかしそれはあくまでも前提条件であって、出現の直接の契機は、ひとえに、該文化に本来そなわる時代性そのものに負っている。すなわち、文献学的には夏殷周三代の成立、考古学的にはいわゆる文明の誕生とかさなる、そのような時代に存した文化であったからこそ、このような画期としての

認識が生まれやすかったのである。夏王朝の問題はさておき、竜山期の諸遺跡から城牆や銅器のような遺構、遺物が陸続と検出されたことも、その趨勢を助長した。もちろん、城牆は限られた遺跡で確認されるのみであり、また、銅器といっても、刀、錐等の工具、もしくは環泡等の装飾品を主体としている。しかし、城牆や銅器の発見は、竜山文化が、その晩期にせよ新石器文化に属するという従来の理解を超えるものであり、しかもそれらが歴代王朝の中心地である中原以外の地に多く分布している事実は、中国全土の規模で文明、王朝、国家の出現を考えていく必要性を我々に痛感させた。今後、竜山文化を研究していく際には、文明の成立前夜としての認識はもちろんのこと、竜山期における考古学諸文化の動態をひろい視野からとらえていくことが要求されることになる。

本稿以下続く諸稿では、研究単位細分化の傾向をふまえ、また文明成立前夜としての認識を根底に横たえながら、竜山期の諸文化、とりわけ後世中原と称されることになる黄河中流域の考古学文化に対する基礎的な研究を順次紹介していきたい。筆者はこれまでに公表した一連の論考のなかで、考古学の立場から殷王朝(二里岡文化)の成立にかかわる問題を取りあげてきた。<sup>10)</sup>いまのところ、そこで得た結論に變更の余地はないのであるが、中原において、竜山期、二里頭期、二里岡期、殷墟期と継続する時代の流れを、もうひとつダイナミックにかみきれていないきらいがあった。王朝が成立していく社会や文化の変遷過程をより構造的に描きだすためには、基本に立ち戻り、竜山期諸文化の動態をつぶさに観察するところから再度やり直していく必要

がある。基礎研究から派生する様々な問題を逐次検討しつつ、そこに理論面からの補強を加えることによって、はじめてこの問題に深く分け入った論証が可能となつてこよう。本稿はその第一歩としての意味をもつものである。

考古学研究の基本は編年にあるとはよくいわれる言葉であるが、この基礎研究においても、黄河中流域の竜山期諸遺跡を丹念に観察し、遺跡間の比較や文化様相の推移を組み立てる作業が中心となる。そして、地域間の相互影響関係を探りながら各地方文化の特性を描出してみたい。それにより、竜山期の様相はおのずから姿をあらわしてくるはずであり、また、検討すべき様々な問題も派生してくるであろう。資料は出土土器を使用する。最近では、李権生氏が該地の文化を「後崗文化」と呼び、各地区の諸類型に対して詳細な観察と論考を試みておられるが、筆者は李氏とは別の角度から、黄河中流域の竜山期として切り取られる時空間に対してメスを入れてみたい。なお、ここでは黄河中流域を、①豫央（河南省の中心部）、②豫東（河南省東部）、③豫西（河南省西部）、④豫北冀南（河南省北部と河北省南部）、⑤晋南（山西省南部）の五地域に分けて論をすすめていく。

#### 註

(1) 城子崖遺跡の発見と発掘に関しては、吳金鼎「平陵訪古記」『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』第一本、第四分、一九三〇（民国一九年）、李濟（総編輯）『城子崖』中国考古報告集之一、一九三四、などを参照。なお、城子崖遺跡は現在章丘県に帰属する。

(2) 思いつくままに並べてみても、黒陶文化、二大文化論、廟底溝二期文化、竜山形成期(Lungshanoid)、など、各時期の研究状況を象徴するような概念用語や文化名称が次々と頭に浮かんでくる。これらはどれも学史的な意味における転機をあらわすキーワードとなっている。

(3) 中国社会科学院考古研究所編著『新中国的考古發現和研究』（文物出版社、一九八四）、第二章、一、(三) 楊錫璋「黄河中游的竜山文化」。

(4) たとえば、梁思永氏は、竜山文化を山東沿海区、豫北区、杭州湾区の三地域から成るものと考えていた（梁思永「竜山文化——中国文明的史前期之一」『考古学報』第七冊、一九五四）（概論文は一九三九年に英文で脱稿）。

(5) 安志敏「試論黄河流域新石器時代文化」『考古』一九五九—一〇、などを参照。

(6) 研究単位の細分化と同時に、地方類型を、それぞれに固有な淵源を有する独立した一地方文化とする見方があらわれたことにも注意をむけておきたい（たとえば、吳汝祚「関于夏文化及其来源的初步探索」『文物』一九七八—九、李仰松「從河南竜山文化的幾個類型談夏文化的若干問題」『中国考古学会第一次年會論文集』一九七九『文物出版社、一九八〇、所収、などを参照）。竜山文化としていくることができない以上、地方類型が一文化単位として扱われることはいうまでもないことだが、それらが在地の文化を基盤として出現したとする点に斬新さがうかがえるのである。このような趨勢には、伝播論（一元論）

から独立発生論（多元論）へという、理論面における流行の変化が深く関与していた。

(7) 嚴文明「竜山文化和竜山時代」『文物』一九八一—一六。

(8) 竜山文化に二面性（多元的な面と一元的な面）が存在することは、安志敏氏らによって早くから指摘されていた（安志敏「略論我国新石器時代文化的年代問題」『考古』一九七二—一六）。

(9) ただし、呼び名は様々であり統一されていない。たとえば、「竜山期」「竜山文化期」「竜山文化の時代」などの用語がよく使われている。本稿は基本的に「竜山期」を使用するが、その他の用語をもってこの概念をあらわす場合もある。

(10) 拙稿「土器よりみた二里頭文化（上）（下）」『古代文化』第四二卷、第三号、第五号、一九九〇、同前「殷文化成立試論」『古代学研究』第一二七号、一九九二、などを参照。

(11) 筆者は空足土器（鬲や甗）に焦点をあてた一連の論考を通じて、殷文化の成立に北方の諸文化が深く関与していたことを論証した。

(12) 李権生「後崗文化の編年と類型」『考古学研究』第四〇卷、第三号、一九九三。

## I 豫央

本稿では、河南の中央部よりもやや北寄りの地域をあらわす名称として「豫央」を使用する。具体的にいうならば、北は黄河を越えて東より新郷、修武、温県、孟県を結ぶ線を、南は鄆城、葉県、平頂山、魯山を結ぶ線を、それぞれの北限と南限にあてて。また、東は鄭州、

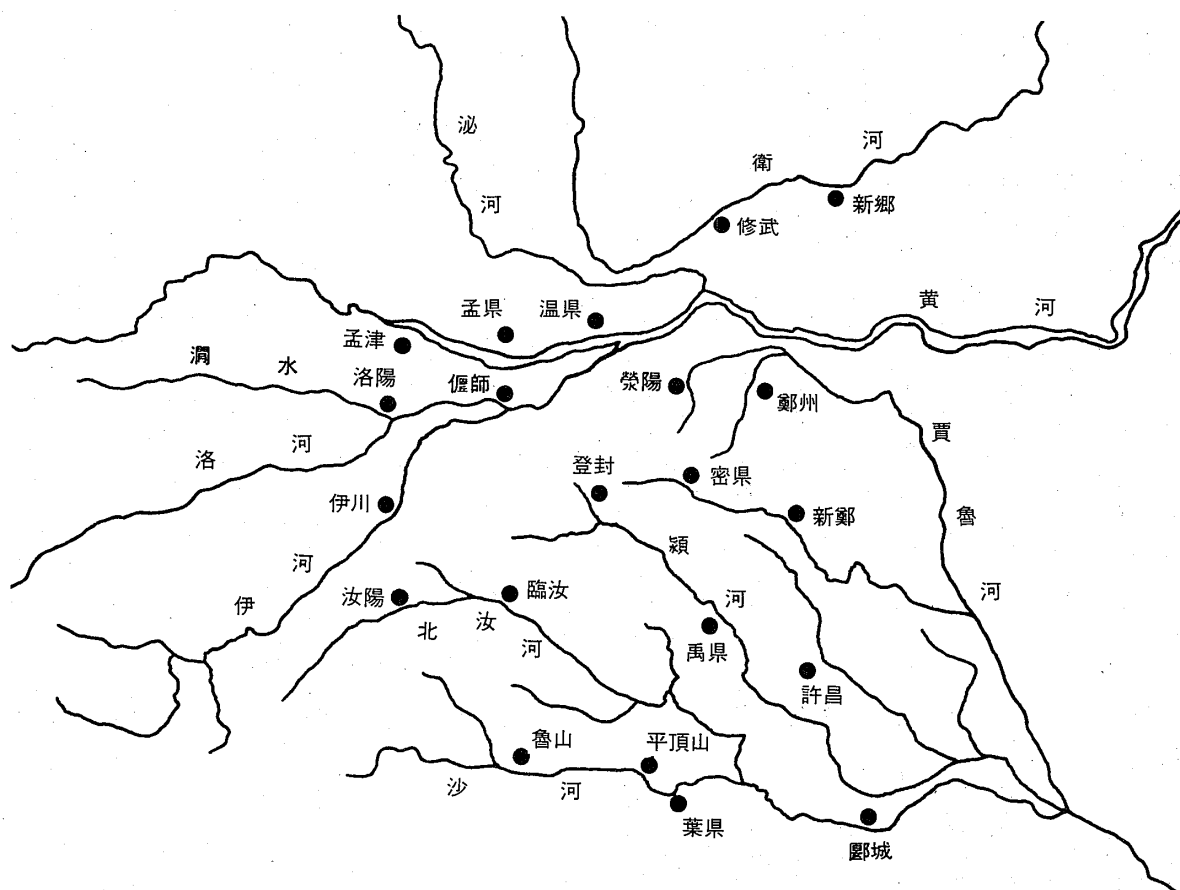


図1 豫央の河川と主要市県位置図

新鄭、許昌、鄆城、西は孟津、洛陽、伊川、汝陽で囲まれる地域を東と西の境界とみなしたい。ただし、この線引きは大勢をあらわしたにすぎず、状況に応じて柔軟に対応していくことを考えている(図1)。

他方、地理的な観点からながめてみると、当地は東側に開ける華北平原への移行地帯にあたる。同時に、相異なる三つの水系——衛河系(衛河上流域)、黄河系(洛河・伊河下流域)、淮河系(潁河上流域と北汝河・沙河流域)——が寄り集まる地域でもある。このような特性をもちあわせていた所以であろうか、竜山期の諸遺跡には四周の影響が及んだ痕跡が頻見される。したがって、実際に観察をすすめていくにあたっては、当地をもう少し細かく区分けし、各細区で積みあげられた情報を総合する手法をとるのが賢明であろう。

便宜上、次のように細分する(図1)。①潁河上流地区、②鄭州地区、③洛陽地区。①は淮河の支流である潁河上流と北汝河、沙河流域を中心とした地域であり、登封、臨汝、禹県から魯山、鄆城一帯が含まれる。②は密県、新鄭ラインを境に潁河上流地区と隣接するが、淮河系というよりも黄河の南岸に近接して位置するため、独立した細区として扱う。ここには、作業の都合上、黄河を隔てて鄭州地区と対峙する衛河上流地域も入れてある。したがって、鄭州、滎陽を中心とした黄河両岸地区とみなすこともできる。③は、黄河に流れ込む洛河と伊河の下流域であり、孟県、偃師、洛陽、伊川一帯がここにあたる。以下、この三つの細区にしたがって記述を進めていきたい。

## 一 潁河上流地区

当地区には、編年作業の拠り所となりうる遺跡が複数存在する。登封王城崗<sup>①</sup>、臨汝煤山<sup>②</sup>、禹県瓦店<sup>③</sup>、鄆城郝家台<sup>④</sup>はその代表例である。これらの四遺跡は、潁河と北汝河の流れに沿う如く、西北から東南方向へ向かつて並んでおり(図1)、細区の様相を探るうえで格好の地理的位置関係を占めている。また、時間のうえからも、竜山期の時間幅をまんべんなく覆っている。ここでは、四遺跡のなかから特に詳細な報告が得られる王城崗をひとまず該地区の標準遺跡に指定し、出土土器を順次観察していくことから始めたい。

### (一) 王城崗遺跡出土の土器<sup>⑤</sup>

王城崗は、潁河(淮河水系)の支流である五渡河の西岸台地上に立地する。支流沿岸といっても本流の潁河まで約四〇〇メートルの距離しかなく、実質上、潁河流域の遺跡群のひとつに数えてさしつかえない。遺跡は、新石器早期の裴李崗文化にはじまり、竜山、二里頭、二里岡、殷代晩期、西周、春秋の各時期の堆積を有している。報告書では、竜山期の遺存を竜山中期と晩期にわたるものと認識している(王城崗竜山文化の五期編年に関しては後述する)。なお、王城崗の川向こう、五渡河の東岸約二〇〇メートルの地点に所在する東周陽城遺跡では、竜山早期と目される遺存が発見されており、これを含めるならば、五渡河の周辺では竜山期を通じて居住の痕跡が確認されたことになる。当遺跡は竜山期のあいだに城牆を構えた時期があり、また青銅器の破片(▲の足腹境部と推定されている)が検出される等、遺跡をとりまく状況も申し分がない。四遺跡のなかでは最も標準遺跡にかなう条件

をそなえているといえるであろう。

王城崗の竜山期に対する五期編年は、各試掘坑内の地層堆積状況と灰坑の打破関係によって決定されたものである。報告書では、二里頭期の分期名称と区別するため、「王城崗竜山文化Ⅰ期」と記されるが、本稿では竜山期のみが対象となるので、単に「王城崗Ⅰ期」もしくは単に「Ⅰ期」と称したい。

さて、報告書の編年図を参照するならば、同一試掘坑内で一期から五期まで地層が連続堆積している例は存在しないこと、一期と二期、四期と五期の区分は灰坑の切り合い関係のみによって決定されていることがわかる。もちろん報告書の編年図は試掘坑の代表例を掲載したにすぎないわけであるが、報告書の記載をみても、灰坑間の打破関係を編年の決め手とするケースが多かった様子がうかがわれる。王城崗の土器を扱うに際しては、五期編年が層序関係のみによって定められたものではないことをあらかじめ知っておく必要がある。ちなみに、各期に対する報告者の年代観を紹介しておくならば、王城崗一期、二期は「竜山文化中期偏晩」、同三期、四期、五期は「竜山文化晩期」となっている。

出土土器の検討に移りたい。王城崗では竜山期に属する復元可能な土器が計四一〇点出土している。それらの器種別占有率をあらわしたのが表1である。表1の左端は本稿が独自に使用する器種名称であり（報告書の器種名称は統一性に欠け、そのまま使うと遺跡間の比較の際に不都合が生じる）、右に順次、時期別出土数、器種別出土数、器種

別占有率、報告書使用器種名となっている。三足器と圈足器は報告書の器種名におおよそしたがったが、平底器の類、とりわけ罐形器と鉢形器に関しては独自の分類と名称を採択した。また、各時期の出土点数には、一三三、二〇三、一二五、四一、一八と片寄りがある（表1最下欄）。土器は二期と三期に集中している。よって、時期ごとに器種の盛衰状況を調べる作業はあきらめざるをえず、型式変化の追跡を除いて、観察は全体的な視野から行なわれることになる。

当遺跡では、平底器の占有率が高く（六六・三五％）、三足器（二六・五八％）、圈足器（二・九二％）がこれに続く。圈足器の数が極めて少ないのがひとつの特徴である。丸底器が一体に検出されない点も二番目の特徴としてあげておく。平底系統の土器のなかでは罐形器と鉢形器が数多く出土しており、前者は平底器の約三割（三一・二五％）、全土器の約二割（二〇・七三％）を、後者は平底器の約六割（六〇・二九％）、全土器の約四割（四〇・〇〇％）を占める。三足器は鼎が圧倒的に多い。三足器のすべてが鼎といっても過言ではなく（三足器の九・〇八％）、土器総数に換算しても二六・五九％という高率を示す。罐形器、鉢形器、鼎の三器種で全体の九割弱（八七・〇三％）に達していることになる。出土土器の絶対量のみから判断するならば、王城崗は「罐形器＋鉢形器＋鼎」、以上三器種の組み合わせからなる考古学文化であった。

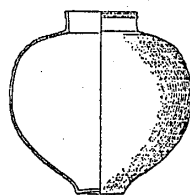
罐形器は深腹罐と小口罐を主体とし、ほかには、円腹罐と単耳罐がわずかに出土している。深腹罐は広口かつ深い胴部をもつ単純なつくりを呈し、最大径部が中央付近にある鼓腹状のものが多くいようである。

表1 王城崗遺跡出土土器統計表

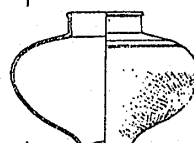
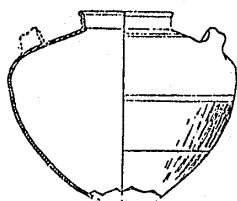
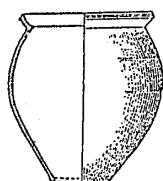
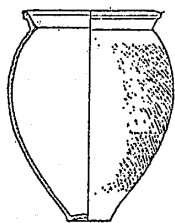
底部形態	器種名称		時 期 別 出 土 数					器種別 出土数	器種別 占有率 (%)	報告書 使用器種名
			一 期	二 期	三 期	四 期	五 期			
平底器系統	罐形器	深腹罐	2	29	7	12	3	53	12.93	壺・瓮・罍・缸 砂質罐 泥質罐 單耳罐 泥質雙耳罐 長頸壺 等
		円腹罐		△				数不明		
		小口罐	2	10	8	5	3	28	6.83	
		單耳罐			2	1	1	4	0.98	
	鉢形器	浅腹盆	5	70	47	13	7	142	34.64	碗・鉢・盆 折腹碗 折腹盆 円腹盆 敞口平底盆 厚胎平底盤 平底盤 小盤 澄濾器 等
		深腹盆		△		1		1	0.24	
		折腹盆	2	残片	7	1		10	2.44	
		刻槽盆	残片	4	残片	2	△	6	1.46	
		平底盆			3	1	1	5	1.22	
	甑		1	4	3	1	1	10	2.44	甑
	壺				1			1	0.24	長頸壺
	杯			8	3	残片	1	12	2.93	杯
	觚			残片	残片	残片		残片		觚
三足器	鼎		9	54	40	4	1	108	26.34	鼎
	鬲		1	残片	残片	残片		1	0.24	鬲
	鬶			残片	残片	残片		残片		鬶・鬶形器
	盂			残片	残片	残片		残片		盂・盂形器
圈足器	豆		残片	10	1	残片	残片	11	2.68	豆・簋
	圈足盤		残片	残片	1	残片		1	0.24	圈足盤
器蓋		器蓋	残片	13	2	残片	残片	15	3.66	器蓋
その他		その他	1	1	残片			2	0.49	壺・缸・筒形器・ 平口瓮 等
合計		合計	23	203	125	41	18	410	100.00	

(数値—復元可能土器数 残片—残片で確認される例 △—出土しているが状況不明な例)

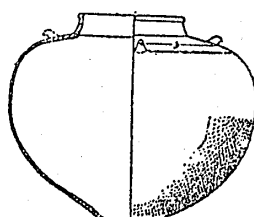
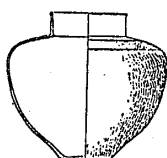
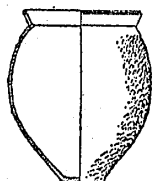
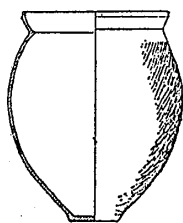
五期



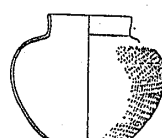
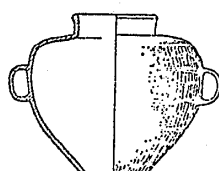
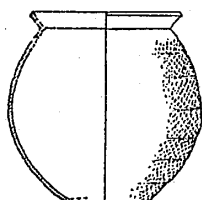
四期



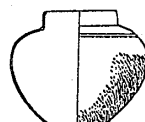
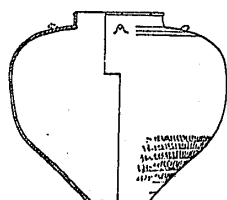
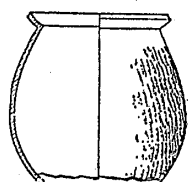
三期



二期



一期



0 10 20cm

图2 王城岗遗址出土土器1(罐形器)



形態変化に乏しいため時期ごとの変遷過程を知るとは難しいが、①二期以前は最大径部が中央もしくはそれより下方に位置するのに対して(図2-14、17)、三期以降は中央もしくは上方へ片寄る例があらわれてくる(図2-4、9)、②三期から五期にかけて平底部がわずかに広くなる傾向がある(図2-10、5、1)、以上二つの流れを読みとることができる。

低頸かつ胴部深くつくられる小口罐は深腹罐ほど出土数は多くないものの(深腹罐五三点、小口罐二八点)、やはり罐形器の代表器種に数えられる。有肩斜胴を基本とし、肩部に鈕、鼻、耳の類を付した例も散見される(図2-6、12、18)。肩が張るタイプに関しては、肩部以下器壁が時期を経るにつれ斜収していく様子をみてとることができ(図2-18、15、11、6)。また、胴部がなだらかなカーブを描くタイプは、鼓腹部が徐々に下方へ広がり(図2-19、16)、三期、四期、五期段階になると、胴部が円鼓状に膨らむ小口円鼓罐(図2-2、12)と、胴部が偏平かつ突鼓状に強く張りだす小口突鼓罐(図2-7)の二種類があらわれてくる。同時に底部が小底化している点もみのがせない。罐形器については、ほかにも三期、五期でみられる単耳罐(図2-3、8、13)に注目しておきたい。これらは編年の指標となる可能性を有している。

鉢形器は罐形器よりも器種の変化に富んでいる。浅腹盆は浅鉢形の容器であり、大小とりまぜて一四二点と出土数が最も多い。他方、深腹盆、折腹盆、刻槽盆、平底盆の四種類は浅腹盆と比べて極端に数少ないが(全部あわせても二二点)、特に後三種は、出土量にかかわりな

く、当遺跡の性格を見極めるうえで大切な役割を果たす。

形態をみていきたい。浅腹盆は各時期を通じてみられ、器壁の二形態(①直線を描き斜収、②微鼓しながら斜収)と底部の二形態(①狭底、②広底)を組み合わせることにによって様々なバリエーションをつくりあげる。たとえば二期出土例をとりあげるならば、図3-1は「直線+狭底」、図3-2は「直線+広底」、図3-3は「微鼓+狭底」、図3-4は「微鼓+広底」、といった具合である。ただし、形態は固定化し変化を追うことは難しい。これは、各時期を通じて日常的に広く使われる器であったことと関連があるのかもしれない。深腹盆は小底で胴部が深い鉢形の容器であり、二期と四期で報告される(図3-5、6)。胴部に独特の特徴をそなえた折腹盆(胴部が折れて稜線を形成する鉢形の器)と刻槽盆(内壁に細線を刻み込んだ鉢形の器)は、それぞれが二型式を有している。前者は器壁が斜収するタイプ(図3-7)と垂直に降下するタイプ(図3-8)、後者は浅鉢タイプ(図3-9)と深鉢タイプ(図3-10、当例は上部欠損しているが口部は朝顔状に開いていたと想定される)に分類が可能である。平底盆は大平底を有する器である。出土五点の型式は一定しない。ここでは、側壁が斜収する例(図3-11)と側壁が外側に大きく湾曲する例(図3-12)、二点を掲載しておく。

罐形器と鉢形器の両種以外に平底器としては、甗、壺、杯、觚が出土している。甗は蒸器としての機能をもつ器である。そのため、底部及び胴下部周囲には孔が複数あけられている。全体のかたちは深腹罐のそれ(広口かつ胴部の深い仕様)を踏襲しているが、底部にはバリ

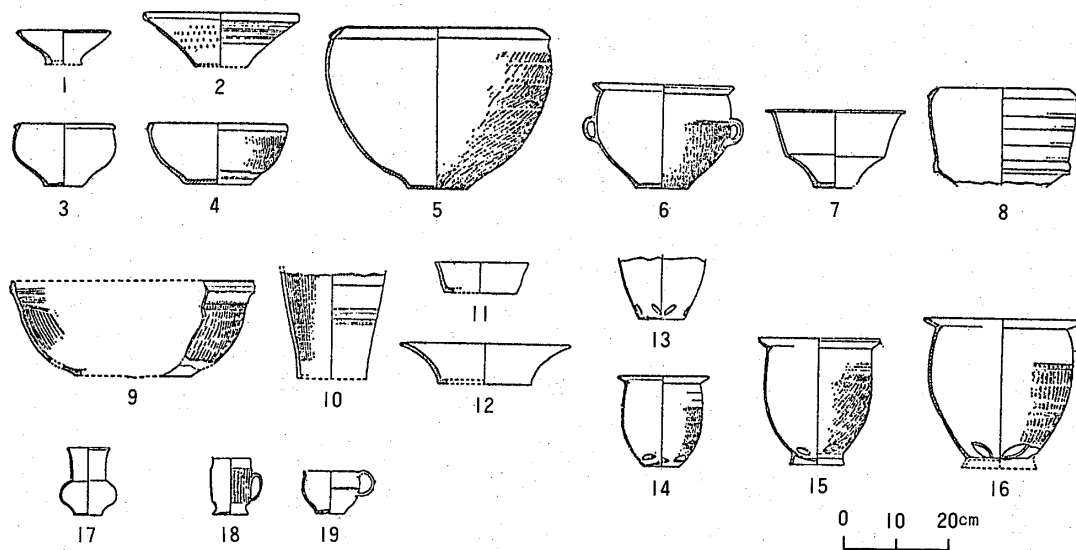


図3 王城崗遺跡出土土器2 (鉢形器・他の平底器系統土器)

エーシェンがうかがえ、①平底(図3-13)、②凹底(図3-14)、③圈足(図3-15、16)の三種類が認められる。なお、圈足を付した甑の底部は平底もしくは丸底を呈する。壺に関しては、頸部が高く立ちあがる点に器種決定の目安をおいた。この基準にしたがうと、実際の出土数は極端に少なくなり、復元器としては三期に属する一点(図3-17)がみられるのみとなる。杯はコップ形小型容器のことをいう。当遺跡では、環状把手を側壁に取り付けたものが多くを占めていた模様である。円筒形(図3-18)と茶碗形(図3-19)の二種が存在し、それらは二期～四期を通じてつくられていたらしい。觚は一般に、器体がラッパ状に開口する縦長仕様の土器として理解されている。残念ながら復元できるものはなく、残片から二期～四期に製作されていた様子がうかがわれるにすぎない。

三足器に移りたい。三足器のなかの九九%以上が鼎であることはすでに述べた。ただし、出土例は実足がおしなべて短く、底部は地につきそうな状態にある。これらの鼎足は、地面とのあいだに空間を確保するというよりも、丸底の器体を単に支えるためだけの役割を担っていた可能性が高い。器体は一樣に広口球体の仕様であり、円腹罐に短い三足を付けた格好と表現できる。王城崗の鼎はこのような特徴を一期から五期まで保持し続けていた。ゆえに、罐形器や鉢形器の場合と同じく形態変遷を追うことは難しいのだが、最小限、次のような系列に分類することは可能であろう。①最大径部が中央にある広口の鼎。二期、三期、五期で出土している(図4-1、5、12)。五期出土例は三足の位置が外寄りにある点で他の諸例と異なる。②最大径部が中央

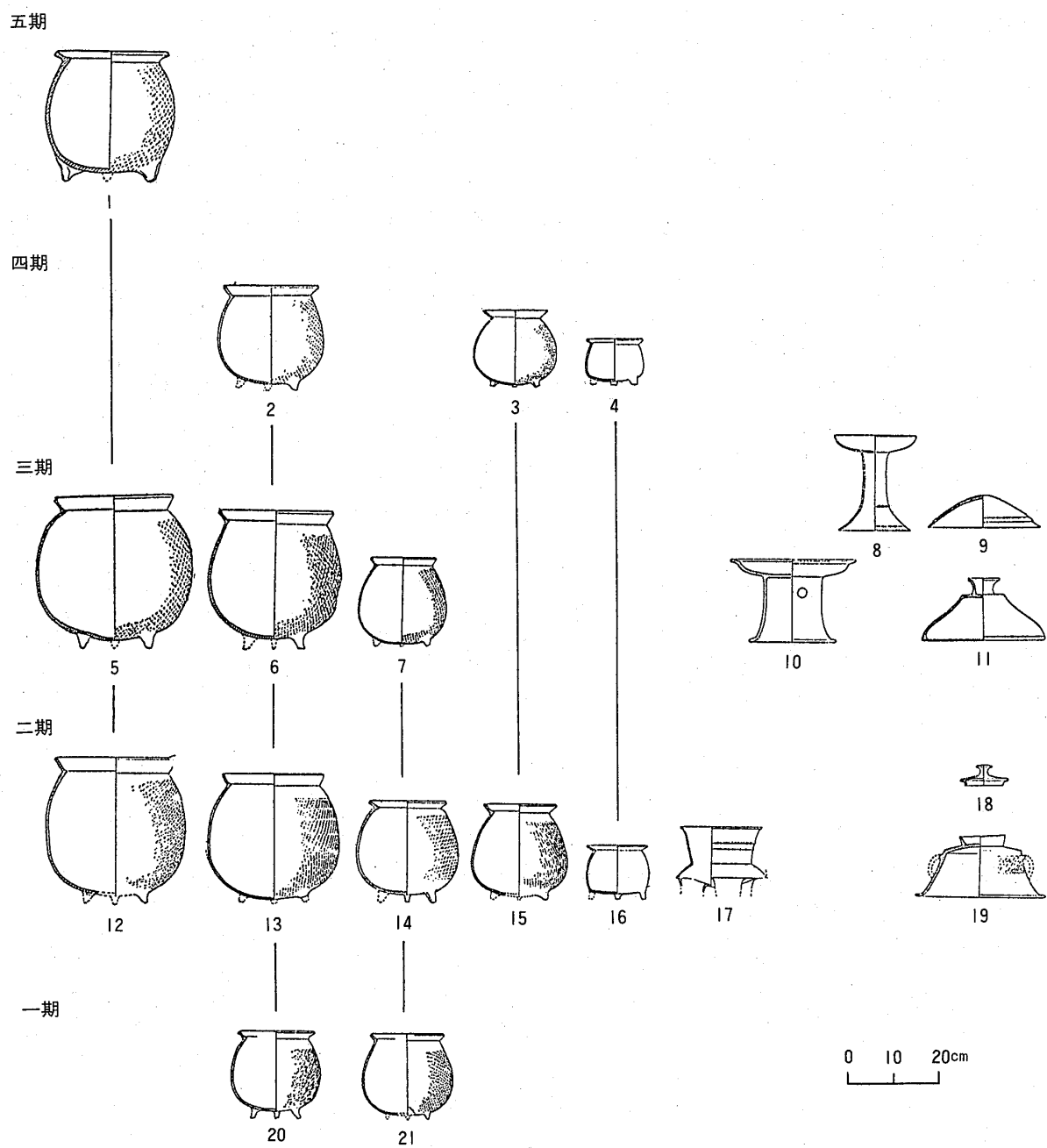


图4 王城崗遺跡出土土器3 (三足器・圈足器・器蓋)

よりも下方に認められる広口の鼎。一期～四期を通じて出土している(図4-2、6、13、20)。③最大径部が中央よりも下方に認められかつ底部が平につくられる鼎。一期～三期で出土している(図4-7、14、21)。三期出土例のように口部がやや締まりぎみのものも含まれている。④最大径部が下方に大きく片寄る鼎。口部の締まり具合は一樣に強い。二期と四期で出土している(図4-3、15)。⑤胴部が偏平な大平底の鼎。①～④とは系列を異にする鼎である。二期と四期で出土している(図4-4、16)。

三足器の残り一%弱のなかに含まれるのは、罎、▲、■の三器種である。二期から四期にかけてとだえることなく出土しているが、二期に属する罎(図4-17)を含めて残片が多く、形態の詳細を把握することはできない。唯一、▲と■の底部が平底仕様であったことをうかがわせるのみである。これらは、絶対量からみる限り当遺跡において非主流の土器であったと考えてさしつかえない。

圈足器についてまとめておく。圈足器は、細柄ラップ形圈足をもつ豆(図4-8)と、圈足が全体に太くつくられる圈足盤(図4-10)の二種を有する。圈足盤が五期で欠落している以外、両種ともに継続して出土している。しかし出土数は少なく、時期間の形態差もほとんど認識されない。

最後にとりあげるのは器蓋である。完形品の数は少ないが、どれも浅盤形を呈する。二期と三期のあいだには若干の形態差がうかがえるようで、二期では頂部が比較的広くつくられるのに対して(図4-18、19)、三期以降では頂部が狭いか(図4-11)、あるいは、なだらかな

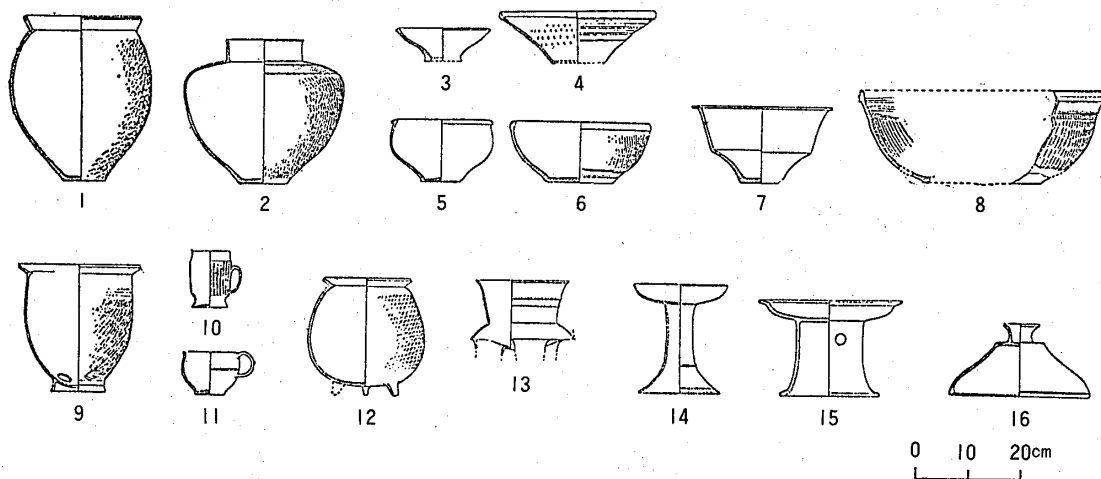


図5 王城崗遺跡の標準器種(指標十二器種)

1. 深腹罐 2. 小口罐 3~6. 浅腹盆 7. 折腹盆 8. 刻槽盆  
9. 甑 10~11. 杯 12. 鼎 13. 罎 14. 豆 15. 圈足盤 16. 器蓋

丘状のもの(図4-9)が出土している。鈕は、頂部と一体化した実鈕(図4-18)と逆圈足状の空鈕(図4-11、19)、それに無鈕例(図4-9)が散見される。

以上、王城崗の出土土器を報告者の編年にしたがって詳細に観察することにより、土器の全容をおおまかに把握することができた。そこで特筆すべきは、各時期で出土量の多寡がありながら、深腹罐、小口罐、鼎などの複数の器種において、一期から五期に至る形態の連続性(変遷過程)が確認されたことである<sup>10</sup>。そこに文化の非連続性は存在せず、よって、王城崗の竜山諸期(一期-五期)は継続的に展開していったものとみなしたい。これはまた、王城崗の竜山期諸遺存がひとつのまとまりをもった考古学文化として認識されうることをも意味している。

いま、観察結果を総合し、当遺跡を代表する器種を選ぶならば次のようになる。深腹罐、小口罐、浅腹盆、折腹盆、刻槽盆、甑、杯、鼎、罍、豆、圈足盤、器蓋、以上の一二器種である(図5)。これらを王城崗遺跡の標準器種、さらには、潁河上流地区や他地区の出土土器を比較する際の基準(物差)とすべき「指標十二器種」として定めた。各時期でまんべんなく出土する、深腹罐、小口罐、浅腹盆、鼎の四器種は絶対量が群を抜いており、標準器種とするのなら問題は無い。また、甑、杯、豆、器蓋の四器種は復元器がそれぞれ一〇点、一二点、一点、一五点と二桁を数え、杯が一期で未見のほかは、すべての時期で確認されている。これらも標準器種としての条件を十分にそなえていると判断される。また、残りの四器種(折腹盆、刻槽盆、

罍、圈足盤)は出土量が少ないが、一期-四期間で欠落なく出土していること、特殊な形態をしているため地域的特性や時期的特性が表現されやすいことをもって標準器種の仲間に加えた。選定からはずれた器種は、ここに述べたいずれの条件も満たしていない。結果として、一二器種中一二器種が選ばれたことになる。

## (二) 諸遺跡の比較検討

王城崗の出土土器を、総合的な観点(表1)ならびに形態面(図2-4)から分析することにより、潁河上流地区の核となりうる遺跡の土器製作状況をあきらかにすることができた。次のステップは、これを軸として他の諸遺跡との比較を行ない、考察対象をひろげていくことにある。まず、先述した標準遺跡とも呼べる三遺跡(煤山、瓦店、郝家台)をとりあげ、王城崗を含めた四遺跡間で土器(器種構成)の異同を浮彫りにしてみたい。そしてそれをもとに、他の竜山期諸遺跡を含めた全体的な観察へ移ることにする。

表2は、王城崗、煤山、瓦店、郝家台、四遺跡の土器の出土状況を一覧したものである。それぞれの遺跡は、五期、二期、四期、五期に分けられているので、時期別に出土の有無を記載し(●○印)、さらに、総合的な出土状況をあらわす欄を各遺跡の最後に設けた(◎印)。指標十二器種は上方にまとめて配してある。なお、△印は、出土しているものの実測図や写真で器影の確認がとれなかった器種である。

表2をみながら考察をすすめていく。最初に遺跡単位の出土状況(総合欄参照)から次のことを指摘しておきたい。①煤山と瓦店の両遺跡

表2 潁河上流地区代表遺跡(王城崗・煤山・瓦店・郝家台)土器出土状況

	県市名		登封					臨汝			禹県					鄧城						
	遺跡名		王城崗					煤山			瓦店					郝家台						
	分期 器種		一期	二期	三期	四期	五期	総合	一期	二期	総合	一期	二期	三期	四期	総合	一期	二期	三期	四期	五期	総合
指標十二器種	罐形器	深腹罐	●	●	●	●	●	◎	●	●	◎	○	●	●	●	◎		●	●	△		◎
		小口罐	●	●	●	●	●	◎	●	●	◎			●	●	◎			●	●	●	◎
	鉢形器	浅腹盆	●	●	●	●	●	◎	●	●	◎	○	△	●	△	◎	○	●	●	●	●	◎
		折腹盆	●	●	●	●		◎	●	●	◎			●		◎						
		刻槽盆	△	●	●	●	△	◎	●	●	◎		●	△	△	◎						
	甑		●	●	●	●	●	◎	●	●	◎		△	●		◎		●	●		●	◎
	杯			●	●	●	●	◎	●	●	◎	○	●	△	●	◎		●				◎
	鼎		●	●	●	●	●	◎	●	●	◎	○	●	●	●	◎	○	●	●	●	●	◎
	罍		△	●	△	△		◎	●		◎		●	●		◎						
	豆		△	●	●	●	△	◎	●	●	◎		△	△		◎		●	●	●	△	◎
	圈足盤		△	●	●	△		◎	●	●	◎		●	●		◎			●		△	◎
	器蓋		△	●	●	●	△	◎	●	●	◎		△	△		◎				●		◎
指標十二器種以外	罐形器	円腹罐		●				◎	●		◎	○				◎						
		単耳罐			●	●	●	◎														
		筒形罐																				
		折腹罐																				
		尊形器																				
	鉢形器	深腹盆		●		●		◎														
		平底盆				●	●	◎													●	◎
		双腹盆																				
		内曲盆																				
	壺				●			◎	●	●	◎	○				◎	○	●		●	●	◎
	背壺																					
	觚			●	●	●		◎	●	●	◎		●	●		◎			●			◎
	瓶											○	△	●		◎		●	●	△		◎
	鬚			●	△	△		◎	●	●	◎		●	●		◎		●	●	●		◎
	盃			●	●	△		◎						●		◎						
	甗									●	◎			△		◎				△	△	◎
鬲																						
簞								●	●	◎												

(○—総合出土状況 ○—竜山早期 ●—竜山(中)晩期 △—図・写真無/判別不能)

は指標十二器種すべてを有する。②郝家台では指標十二器種のうち九器種が出土している。以上の二点である。さて、①のデータは、煤山と瓦店が王城崗と同一の器種構成からなる考古学文化であったことを示唆している。一方、②は、郝家台で指標十二器種中三器種（折腹盆、刻槽盆、甕）が欠落していることを示すものである。問題は、この欠落現象をどのようにとらえるかにある。ひとつの見方として、郝家台では指標十二器種中九器種、しかも王城崗で量が出た深腹罐、浅腹盆、鼎の三器種をそろえていることから、当遺跡を王城崗と同種の考古学文化に比定することが考えられる。しかし他方、郝家台が（本稿で恣意的に設定した）豫央の最南端（王城崗から直線距離にして東南方向約一二〇キロの地）に所在していることを射程に入れるならば、三器種が各時期を通じて製作されなかったのは地域性（地域差）のあらわれであった、とする見方も浮上してくる。<sup>⑪</sup>当遺跡は王城崗と類似した器種構成をもつ。その意味では同種の考古学文化といえようが、そこには地理的位置関係からくる差異も同時に表現されている可能性が高いとひとまずは理解しておく。

次に、時期別の出土状況をみていきたい（表2）。指標十二器種に限定した場合、王城崗と煤山のデータには時期ごとの変化がほとんどあらわれていない。王城崗は五期段階になると器種を若干減少させるが（九器種）、これは出土絶対量が一八点と少ない所以であろう。これを除けば、両遺跡のどの時期においても一二器種または一一器種が出土している。これに対して、瓦店と郝家台では時間の経過にともなう変化がうかがえる。とりわけ瓦店一期と四期では器種が激減する（前者

四器種、後者六器種）。もちろんこれも、王城崗五期の場合と同じく出土量に左右された結果であるのかもしれない。ただ、瓦店一期が深腹罐、浅腹盆、鼎、杯の四器種のみで構成されている事実と、同時期が竜山の早期段階（報告者<sup>⑫</sup>）に属するとされていることには一応の注意を払っておきたい。郝家台についても同様のことがいえる。当遺跡は五期間を通じて指標十二器種の出方が少ないのだが、とくに一期は浅腹盆と鼎の二器種に限定される。そして、郝家台一期にも竜山早期（報告者<sup>⑬</sup>）という年代観が与えられているのである。どうやら竜山早期と報告される遺存は、竜山（中）晩期に属する王城崗と土器の様相において隔たりがあったらしい。

以上の簡単な分析により、二つの問題が輪郭をあらわしてきた。ひとつは、地域差の問題である。これは、郝家台で特定の三器種が欠落する現象に代表される。もうひとつは、時間差の問題である。これはいまのところ、王城崗を指標とする竜山（中）晩期段階と、いわゆる竜山早期段階との相違としてあらわれてきている。

それでは、この時空両次元にわたる問題を念頭におきながら、他の諸遺跡にまで視野を広げてみたい。表3は、当地区の主要な竜山期諸遺跡における土器の出土状況を所屬県市別にまとめたものである。表2でとりあげた四遺跡については、重複を避けるため、全体の出土状態のみを記した（◎印）。ただし、瓦店一期と郝家台一期には独立した欄を与えてある。時間差の問題が絡んでくるからである。そのほか、過渡期（仰韶→竜山）と報告される遺跡は◇印、竜山早期とされる遺跡は○印、竜山（中）晩期とされる遺跡は●印で、各器種の出土の有

表3 潁河上流地区諸遺跡土器出土状況

	県市名		登封			臨汝					禹県					鄆城		
	遺跡名 器種		王城崗	程窯	北溝・陽城	煤山	李楼一期	李楼二期	北劉莊二期	北劉莊三期	大張	瓦店一期	瓦店他期	吳灣下層	吳灣上層	谷水河三期	郝家台一期	郝家台他期
指標十二器種	罐形器	深腹罐	◎	●	○	◎			◇	●	◇	○	◎	○	●	◇		◎
		小口罐	◎	●		◎	●	●					◎		●			◎
	鉢形器	浅腹盆	◎	●	○	◎	●	●	◇	●	◇	○	◎	○	●	◇	○	◎
		折腹盆	◎	△		◎				●			◎					
		刻槽盆	◎	●	○	◎				●			◎		●			
	甑		◎	●	○	◎				△			◎					◎
	杯		◎	△	○	◎	●	●	◇	●	◇	○	◎	○	●	◇		◎
	鼎		◎	●	○	◎	●	●	◇	●	◇	○	◎	○	●	◇	○	◎
	斚		◎	●	○	◎	●						◎					
	豆		◎	△	○	◎			◇	△	◇		◎	○		◇		◎
	圈足盤		◎	●		◎	●	●		●			◎		●			◎
	器蓋		◎			◎	●	△	◇	●	◇		◎	○		◇		◎
指標十二器種以外	罐形器	円腹罐	◎			◎						○						
		単耳罐	◎				●											
		筒形罐			○				◇					○				
		折腹罐							◇									
		尊形罐							◇									
	鉢形器	深腹盆	◎															
		平底盆	◎	△				●		●								◎
		双腹盆							◇									
		内曲盆																
	壺		◎		○	◎	●		◇	●	◇	○		○		◇	○	◎
	背壺								◇									
	觚		◎			◎	●	●					◎					◎
	瓶			△								○	◎					◎
	鬲		◎	△	○	◎	●						◎	○		◇		◎
	盃		◎										◎					
甗					◎							◎					◎	
鬲																		
簞					◎													

(◎) - 標準四遺跡出土状況 ◇ - 過渡期 ○ - 竜山早期 ● - 竜山(中) 晩期 △ - 図・写真無/判別不能)



無をあらわした。実測図(写真)で確認できない場合は表2同様△印を使つてある。

あらたに加えられた遺跡は七例ときほど多くはない(表3)。しかし、そこには仰韶から竜山への過渡期(報告者)とされる遺跡(遺存)があらたに加えられている。内訳を紹介しておこう。北劉莊二期、大張、谷水河三期はまさに過渡期の遺存にあたる。北溝(陽城)<sup>17</sup>、吳灣下層<sup>18</sup>は竜山早期と報告される。竜山(中)晩期に属するのは、程窯<sup>19</sup>、李楼一期、二期、北劉莊三期<sup>21</sup>、吳灣上層<sup>22</sup>の五遺存である。数としては王城崗併行の遺跡が多いことになる。

先般、瓦店一期と郝家台一期で指標十二器種の出土率が低下する旨を述べたが、ここでも過渡期もしくは早期と報告される遺跡の出土状況は悪く、竜山早期の北溝で八器種が確認される以外は一様に六器種どまり、しかも、過渡期の三遺跡(北劉莊二期、大張、谷水河三期)は六器種の構成(指標十二器種中)までが同じである(深腹罐、浅腹盆、杯、鼎、豆、器蓋)。そこでまずは、時間差の問題に光をあててみる。過渡期と早期の土器を王城崗の土器と比較観察することによって、時間の推移にともなう土器の移り変わりをあきらかにしてみたいのである。

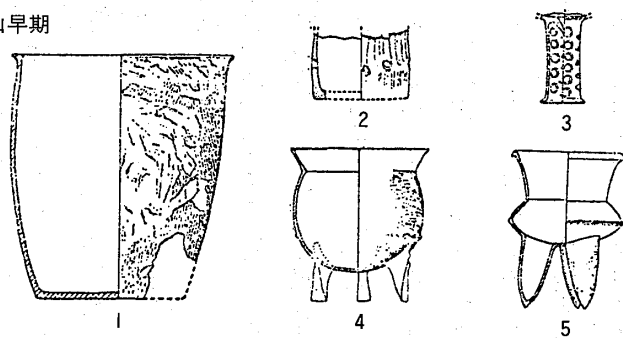
最初は過渡期の遺跡(北劉莊二期、大張、谷水河三期)に着目してみたい。表3を一瞥すると、平底系統の土器では、折腹盆、刻槽盆、甗といった特殊な形態や用途をそなえたもの、ならびに小口罐が欠落していることに気がつく。これらの遺跡ではそのかわりに、肩部の張

った小口細頸の壺形土器が多くつくられていた(図6-6、16<sup>23</sup>)。この細頸壺は過渡期を特徴づける器種のひとつとして注目されよう。三足器に関しては、甗の欄が空白であることを目にいく。だがそれよりもここでは鼎の形態が豊富であることを強調しておきたい。王城崗の鼎は細部に变化こそあれ、円腹罐形の器に三短足が付されるのを常としていた。ところが過渡期の三遺跡では、円腹罐形の鼎(図6-7)以外に、器身が鉢形(図6-10<sup>24</sup>)、壺形(図6-13<sup>25</sup>)、偏鼓罐形(図6-17)を呈する様々なかたちの鼎が製作されていた。これらの一連の鼎は、王城崗竜山期の諸例と比べてあきらかに異質なものである。過渡期の段階、当地区の鼎には豊富なバリエーションが存在した。それが、竜山(中)晩期段階になると円腹罐形の短足鼎に統一されていった様子をここからは読みとることができる。

さらにいうならば、過渡期の土器には、山東、湖北方面からの影響を想起させるような諸例が数多く混在している。これも王城崗の段階ではあまりみられない、該時期に特有な現象である。北劉莊二期と谷水河三期を例にとるならば、前者の尊形器(図6-8)、背壺(図6-9)、後者の鏤孔付豆圈足残片(図6-11)、▲残片(図6-12)には大汶口文化の影響が、前者の圈足付杯(図6-14)、双腹盆(図6-15)には屈家嶺文化の影響があらわれている。

これまでの観察によって、過渡期の土器は、器種構成と形態の両面において王城崗の土器群と隔たりがあることをあきらかにしえたと思う。北劉莊二期、大張、谷水河三期のいわゆる過渡期と報告される三

竜山早期



過渡期

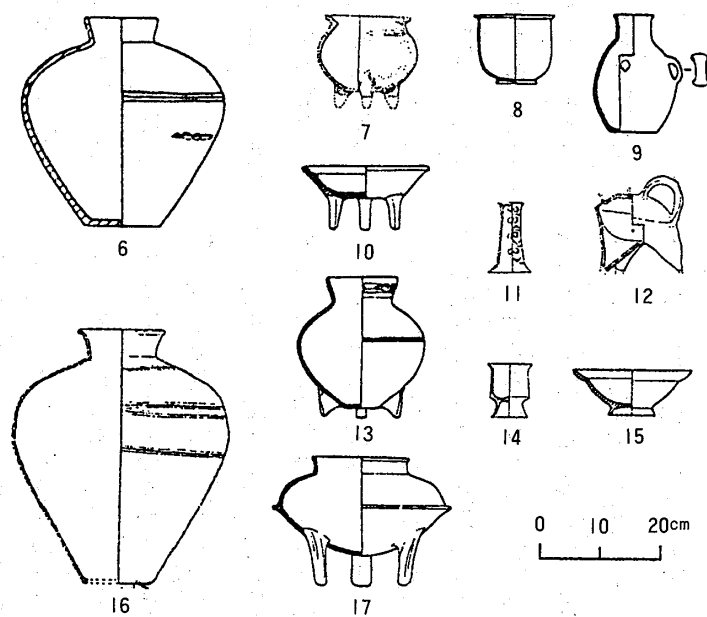


図6 過渡期・竜山早期諸遺跡出土土器

1～5. 北溝（陽城）遺跡（登封）

6, 8～10, 13～15, 17. 北劉莊二期（臨汝）

7, 11～12, 16. 谷水河三期（禹県）

遺跡（遺存）と王城岡竜山期のあいだに介在する時間差は、土器の顯著な差異となつてあらわれていることになる。潁河上流地区の過渡期の遺跡は、王城岡に代表される同地区の竜山（中）晩期遺跡とあきらかに一線を画していた。

次に、竜山早期と竜山（中）晩期の差異を検証してみたい。しかし、早期の資料にはかなりの制約がある。周知のように瓦店一期と郝家台一期は資料が少ない。また、呉湾下層に対しては、竜山期の比較的早い特徴を有しながらいくらか時代が降るとの年代観が与えられている<sup>26</sup>。したがって、唯一頼りになるのは北溝の資料である。このような状況をふまえたうえで、竜山早期の特徴を列挙すると次のようになる。

① 竜山早期の遺跡では、指標十二器種の出土率が晩期と比べて著しく低い。それぞれ、八器種（北溝）、四器種（瓦店一期）、六器種（呉湾下層）、二器種（郝家台一期）となつてゐる。② 北溝と呉湾で筒形罐が出土している（図6-11<sup>27</sup>）。この種の罐は晩期段階になると製作されなくなる。③ 北溝の甗（図6-2）は筒状の土器の胴側下部に穴を穿つた特異な形態を呈する。王城岡の甗は深腹罐形をなしていた。④ 北溝と呉湾の円腹罐形鼎（図6-4）は、口縁が幅広く、足が長くつくられてゐる。<sup>28</sup> 王城岡の同形鼎は例外なく短足仕様であり、口縁幅も狭い。⑤ 北溝では甗の胴部が縦長につくられてゐる（図6-5）。甗は時代を経るにつれ、たとえば瓦店二期出土例<sup>29</sup>のように胴部横長のタイプが多くなる。⑥ 北溝で多数の鏤孔を穿つた圈足残片が出土している（図6-3）。同様の圈足残片は谷水河二期でもみられた（図6-11）。⑦ 瓦店一期で過渡期の遺跡に特徴的だった小口細頸壺に類似した壺形器

が出土している（当例はそれらと比べて頸部が高い<sup>30</sup>）。以上である。

①は器種構成における特徴である。再三述べているように、瓦店一期と郝家台一期で器種が少ないのは絶対量が少ない所以とも解せるのであるが、北溝で八器種止まりという事実がここであがつた以上、やはり早期の製作器種は晩期よりも本来的に少なかったとみなしたい。②④⑤に関しては、廟底溝二期文化のそれらとの類縁性が話題にのぼるであろう<sup>31</sup>。いずれにしろそこで指摘した土器は、竜山（中）晩期段階に入ると姿を消す（もしくは姿を変える）。ただし、鼎と甗の器種としての連続性は保たれていく。これらは、同一器種でありながら晩期になると型式に変化がもたらされた例である。⑥と⑦は過渡期といわれる遺跡との関係を示す資料である。これは、竜山早期に残された過渡期的様相と考えることができる。しかし、鼎の器身形態の多様性、周辺地域（特に東方と南方）からの影響等、過渡期の遺跡で観察された特質は、この時期に引き継がれていない。他地域からの影響ということであれば、むしろ西方（廟底溝二期文化）を重視すべきであろう。総じて①⑦からは、竜山（中）晩期の土器との異質性を保ちながら他方で過渡期とも異なる早期土器の様相がおぼろげながら姿をあらわしてくる。

これまで、各時期の土器をもつばら差異性に着目して分析してきたが、逆に共通性は観察されないのであろうか。表4は、それぞれの時期で製作された器種を、指標十二器種に限ってまとめたものである。これをみると、全期を通じてつくられたのは、深腹罐、浅腹盆、杯、鼎、豆、器蓋の六器種となつてゐる。形態まで視野に入れるならば、

表4 潁河上流地区出土器種の推移  
(指標十二器種)

器種	時期	過渡期	早期	晚期
罐形器	深腹罐	○	○	○
	小口罐			○
鉢形器	浅腹盆	○	○	○
	折腹盆			○
	刻槽盆		○	○
	甗		○	○
	杯	○	○	○
	鼎	○	○	○
	豆	○	○	○
	圈足盤			○
	器蓋	○	○	○

そのなかの深腹罐と浅腹盆は基本的に大きな変化を上げていかない。図は省略するが、どの時期をとっても似たような格好を呈している。

また、鼎は、過渡期でつくられた諸種の例を除き、円腹罐形の器身という一点においてわずかなつながりが認められる。ただし細部（口部や三足）のつくりは各時期で異なる<sup>②</sup>。これに対して、杯、豆、器蓋の三種は、器種レベルでこそ継続されるものの、形態は受け継がれていない。各時期各様のものがつくられていた。ということは、共通する六器種中、深腹罐、浅腹盆、円腹罐形鼎の三器種にある程度の継承性が認められたことになる。ところで、王城崗の土器を分析した際に、該遺跡は「罐形器+鉢形器+鼎」、以上三器種の組み合わせを主体とする考古学文化であった旨を述べた。竜山（中）晚期段階で中心を占めた器種は過渡期の段階ですでに出現していたわけである。しかも、似たようなかたちのものが製作されていた。もちろんこれをもって、三

時期の文化的な継承性を説くことはできない。しかし、深腹罐、浅腹盆、円腹罐形鼎が、潁河上流地区の過渡期～竜山（中）晚期という時間幅のなかで継続して製作されていたことは、ひとつの事象として明記しておくべきであろう。

これまでの分析であきらかなように、過渡期、竜山早期、竜山（中）晚期の各土器群には同質性よりも異質性の方が強くあらわれている。この事実に変更の余地はない。ただ、共通面にも目を向けたことにより、①各時期の特質は三器種（深腹罐、浅腹盆、円腹罐形鼎）以外の土器のなかに求められること、②そしてそれらの土器群が各時期のアイデンティティー（独自性）をつくりだしていたこと、以上の二点をより鮮明に描きだすことができた。

異質性と同質性について論じ終えたところで、時間差の問題をまとめておこう。実はこれまで、ことわりもなく、報告者が通常使用する時期区分と名称をそのまま下敷にして論を進めてきたのだが、ここにおいて、過渡期（仰韶～竜山）、竜山早期、竜山（中）晚期の名称が、本稿の分析を受けた結果として正式に受け入れられたことになる。その呼称を使用して、当地区の遺跡（遺存）群を区分するならば以下のようになる。

- ① 過渡期——北劉莊二期、大張、谷水河三期。
- ② 竜山早期——北溝（陽城）、瓦店一期、吳灣下層、郝家台一期。
- ③ 竜山（中）晚期——王城崗一期～五期、煤山一期～二期、李樓一期

二期、北劉莊三期、瓦店二期～四期、吳灣上層、郝家台二期～五期。

これをもって、時間差の問題のしめくりとすると同時に当地区の編年の第一歩とする。<sup>(33)</sup>

註

(1) 河南省博物館登封工作站「一九七七年下半年登封告成遺址的調査發掘」『河南文博通訊』一九七八—。河南省博物館登封工作站「一九七八年上半年登封告成遺址的發掘」『河南文博通訊』一九七八—三。河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部「登封王城崗遺址的發掘」『文物』一九八三—三。河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部「登封王城崗与陽城」(文物出版社、一九九二)。

(2) 洛陽博物館「河南臨汝煤山遺址調査与試掘」『考古』一九七五—五。中国社会科学院考古研究所河南二隊「河南臨汝煤山遺址發掘報告」『考古學報』一九八二—四。河南省文物研究所「臨汝煤山遺址一九八七—一九八八年發掘報告」『華夏考古』一九九一—三。

(3) 河南省文物研究所、鄭州大學歴史系考古專業「禹県瓦店遺址發掘簡報」『文物』一九八三—三。

(4) 楊清「河南鄆城郝家台遺址出土的陶瓶和陶▲」『華夏考古』一九九一—二。河南省文物研究所、鄆城県許慎紀念館「鄆城郝家台遺址的發掘」『華夏考古』一九九二—三。

(5) 王城崗遺跡に関する記述は、ことわりがない限り、註1の河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部一九九二年報告に負う。

(6) 註1、河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部一九九二年報告、一五頁、表一「王城崗及其周圍各期地層疊压与打破關係表」、参照。

(7) 註1、河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部一九九二年報告、六頁、参照。

(8) 註1、河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部一九九二年報告、一一頁、参照。なお、以下本稿では、おおよそ王城崗一期—五期に相当する竜山期の時代に対して、報告者の使う「竜山文化中期偏晩」と「竜山文化晩期」をあわせた「竜山(中)晩期」なる呼称を使用する。後述の分析からもあきらかなように、王城崗の一期—五期は、(過渡期や竜山早期との比較において)土器型式の連続性が顕著にうかがえる。したがって、ひとまず中期と晩期はひとくくりの枠のなかで考えていきたい。

(9) 罐形器は口部広く胸部深くつくられた容器の総称である。つくりの違いにより、深腹罐、円腹罐、小口罐、单耳罐の四器種を設定した。一方、鉢形器は浅い容器の総称として用いている。罐形器と同じく、形態の違いにより、浅腹盆、深腹盆、折腹盆、刻槽盆、平底盆の五器種を設定した。

(10) 深腹罐、小口罐、鼎のように変遷過程を图示(図2、図4)することはしなかったが、ほかに、浅腹盆、折腹盆、甑、杯、豆などの器種で形態の連続性(固定性)が確認されている。

(11) 欠落している三器種のうち刻槽盆に関しては、朝顔型に開口する型式が該遺跡の北側と南側にひろく分布している点を指摘しておく。北側の王城崗で残片が出土していることはすでに述べた(図3—10)。南側では、同じ河南の下王崗遺跡(淅川)『文物』一九七二—一〇、一二頁、図二—一六、参照)、さらに湖北の諸遺跡(房県、随州、当

陽、江陵、天門等の諸市県に帰属)でも頻見される。したがって、郝家台で刻槽盆が欠落しているのは資料不足ということも十分に考えらる。

(12) 註3、河南省文物研究所他報告、参照。

(13) 註4、河南省文物研究所他報告、参照。

(14) 河南省文物研究所「河南臨汝北劉莊遺址発掘報告」『華夏考古』一九九〇—二。

(15) 河南省文化局文物工作隊「河南臨汝大張新石器時代遺址発掘簡報」『考古』一九六〇—六。

(16) 河南省博物館「河南禹県谷水河遺址発掘簡報」『考古』一九七九—四。

(17) 註1、河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部一九九二年報告。河南省文物研究所「登封告成北溝遺址発掘簡報」『中原文物』一九八四—四。

(18) 河南省文物研究所、禹県文管会「禹県吳湾遺址試掘簡報」『中原文物』一九八八—四。

(19) 趙会軍、曾曉敏「河南登封程窯遺址試掘簡報」『中原文物』一九八二—二。

(20) 中国社会科学院考古研究所河南一隊「河南汝州李楼遺址的発掘」『考古学報』一九九四—一。

(21) 註14、河南省文物研究所報告に同じ。

(22) 註18、河南省文物研究所他報告に同じ。

(23) 細頸壺は、北劉莊二期、谷水河三期(図6—6、16)のほかに

大張でも出土している(註15、河南省文化局文物工作隊報告、図版二—五、参照)。

(24) 鉢形の器身をもつ鼎は、北劉莊二期(図6—10)のほかに、大張(註15、河南省文化局文物工作隊報告、図版三—四、参照)、谷水河三期(註16、河南省博物館報告、図版三—五、参照)でも出土している。

(25) 壺形の器身をもつ鼎は、北劉莊二期(図6—13)のほかに谷水河三期でも出土している(註16、河南省博物館報告、図版三—三、参照)。

(26) 註18、河南省文物研究所他報告に同じ。

(27) 吳湾出土例は、註18、河南省文物研究所他報告、図版一—二を参照。

(28) 吳湾出土例は、註18、河南省文物研究所他報告、図版一—一を参照。

(29) 註3、河南省文物研究所他報告、四—一頁、図六—二、参照。

(30) 註3、河南省文物研究所他報告、四—六頁、図一—三、参照。

(31) 北溝の筒形罐、凹腹罐形鼎、罍と類似した例は、河南西部に位置する廟底溝遺跡(陝県)で出土している(中国科学院考古研究所『廟底溝与三里橋』科学出版社、一九五九、六七頁、図四—三、六八頁、図四—四、七〇頁、図四—五、参照)。これらはいずれも、廟底溝二期文化(竜山早期段階)に特徴的な土器と考えられる。

(32) 竜山早期の他の遺存からは、北溝出土例(図6—4)よりもさらに王城崗の鼎に近いものが出土している。たとえば、郝家台一期出

土例(註4、河南省文物研究所他報告、六五頁、図四一四、参照)は、最大径部が下方に大きく片寄っており、これは王城崗二期出土例(図4-15)へとつながるものであろう。

(33)本稿では潁河上流地区の土器群を、過渡期、竜山早期、竜山(中)晩期の三期に分けするにとどめておく。より詳細な編年、竜山中期と晩期の違いなどに関しては、豫央の他地区(鄭州地区、洛陽地区)の観察をまっけて行ないたい。ちなみに、竜山(中)晩期の遺跡(遺存)のなかで中期に属する可能性のあるのは、王城崗一期、二期「竜山文化中期偏晩」(註1、河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部一九九二年報告、一一一頁、参照)、それに郝家台二期「河南竜山文化中期偏早」(註4、楊清報告、一〇九頁、参照)である。そのほか、本論中で時間差とともに指摘した地域差の問題についても、豫央全体という広い視野のなかで論じた方がより効果的であろう。これらの残された課題は次稿「黄河中流域竜山期諸文化の基礎研究(二)」——豫央(鄭州地区、洛陽地区)——にゆずることにしたい。

(一九九五年八月下旬脱稿)

## 図表出典

図1 表1-4 筆者作成

図2-5 河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部『登封王城崗与陽城』(文物出版社、一九九二)、図一七(二六頁)、図二六(五二頁)、図二七(五四頁)、図二八(五七頁)、図三〇(六〇頁)、図三一

(六一頁)、図三七(七四頁)、図三八(七七頁)、図四一(八一頁)、図四二(八三頁)、図四七(九三頁)、図四八(九五頁)、図四九(九八頁)、図五三(一〇五頁)、図五四(一〇七頁)。

図6 ①河南省文物研究所、中国歴史博物館考古部『登封王城崗与陽城』(文物出版社、一九九二)、図一一六(二〇八頁)、図一一七(二〇九頁)。②河南省文物研究所「河南臨汝北劉莊遺址発掘報告」『華夏考古』一九九〇—二、図一四(一九頁)、図一六(二二頁)、図一九(二五頁)、図二〇(二六頁)。③河南省博物館「河南禹県谷水河遺址発掘簡報」『考古』一九七九—四、図六(三〇五頁)。